

情動と言語発達

企 画：	小林春美	(東京電機大学)
	高橋 登	(大阪教育大学)
	田中みどり	(女子栄養大学)
	大伴 潔	(東京学芸大学)
司 会：	小林春美	(東京電機大学)
話題提供者：	明和政子	(京都大学大学院教育学研究科)
	川田 学	(北海道大学大学院教育学研究科)
	狗巻修司	(佐賀大学大学院教育学研究科)
指定討論者：	麻生 武	(奈良女子大学大学院人間文化研究科)

[企画主旨]

言語はその言語を使う人々の間で理解された、表象を伴う記号システムである。これまで言語獲得は、いわば「知的」なシステムの獲得を可能とする人間の能力の側面から語られることが多かったと言える。しかし実際の子どもの育ちにおいては、言語は周囲の人々も含め感動や共感を伝えるために多用され、情動の側面が言語獲得の基本的な推進力となっているように見える。では情動はどのようにヒトの言語システムの獲得に関わるのか。本シンポジウムではこの問題に意欲的に切り込んでいる研究者3名に話題提供をいただく。明和氏は乳児期において情動情報がいかに言語情報として符号化、意識化されるかについて、川田氏は自閉症の事例等から、表象そのものが社会的構成物であるとの観点について、狗巻氏は自閉症児における共同注意のスキルと情動の関係について、いずれもデータを基に議論を展開する。麻生氏には研究と支援の両面から討論をいただく。

「情動情報の符号化過程と言語獲得」 明和政子（京都大学大学院教育学研究科）

ヒトの対人コミュニケーションは、言語以外にも、声の質や大きさ、表情、動作など、多くの情動性信号のやりとりによって支えられている。ヒトは言語情報によって手順的・記述的な情報を伝達し、情動情報によって内部状態を伝達しているともいえる。私たちの研究グループは、情動状態の知覚と表出の発達の起源、および情動状態を他者と動的に共有していく過程（信号の規則性、パターン）およびそれにかかわる諸要因を、脳生理信号の測定、情報科学的な解析手法により明らかにしてきた。私たちは、以下の仮説のもと研究を進めてきた。①出生直後から言語獲得が本格的に始まるまでの二年間、生得的な情動状態の一部が符号化・意識化されることにより、情動情報が言語情報と分離していく過程が存在する、②自己の情動状態を符号化するにいたる過程では、養育者が乳児に対しておこなう鏡のような情動情報、言語情報のフィードバックが不可欠である。当日は、これまでの成果の一部を紹介するとともに、議論を通してヒトの言語獲得における情動の役割について新たな理解を目指したい。

1. 情動状態の発達の起源の解明—ヒトはいつからどのような情動情報処理を行っているのか？ 生後直後の満期産児および、本来は胎児である早期産児（修正満期）を対象として、ヒトの音声に含まれる情動情報のひとつ、プロソディの脳内処理活動を調べた。ヒトの音声提示時に起こる脳信号を、近赤外分光法（NIRS）を用いて計測した結果、両群において異なる脳活動がみられた。プロソディ情動情報に対して、満期産児の脳は右半球の優位性を示したが、早産児群ではそうした優位性はみられなかった。発達初期の経験（胎内外）が脳の発達に影響することを見出した（Naoi, Fuchino, Shibata, et al., 2013, Fuchino, Naoi, Shibata, et al., 2013）。

2. 情動情報と言語情報の分離—情動情報はどのように符号化されていくのか？ 生後12—23ヶ月児を対象として、発話に含まれる情動情報（情動語とプロソディ）が、視覚的情動情報（表情）の処理に与える影響を調べた。これまでの行動観察研究では、ヒトが情動語（かなしい・うれしいなど）を実際に使い始めるのは生後2年をまたなければならないとされていた。しかし、脳生理信号の解析からは、情動情報の符号化は生後2年より前、情動語を使用する以前にすでに始まっていることが示されつつある（Naoi, Fuchino, Okanoya, et al., in prep.）。

「情動、表象、表現としての言語」 川田 学（北海道大学大学院教育学研究院）

①情動と表象の関係 言語発達の認知的基盤である表象の発生機序について、従来の説明の中心は「行為の内化」(Piaget,J.)によるものであった。そこでは、感覚運動的活動の直線的な延長上に記号を操作し、象徴的活動を可能にする表象の世界が描かれた。しかし、感覚運動的活動には自動化された慣習的反應も含まれ（発達初期には特に優勢）、そうした自動作用は表象・意識の介入によってむしろ妨害させられる。表象世界は社会的構成物であり、個人的な感覚運動的活動が社会的道具としての言語を生み出すという説明にも矛盾があると考えたのが Wallon,H.である。Wallon は情動活動が姿勢という外的表出を連動する仕組みこそが、乳児を文化的先行者の心的システムと結びつけ、関心や内的状態を共有させることを通して表象や言語の獲得をもたらしたと考えた。発達過程の最初は感覚運動的段階ではなく、情動的段階が置かれた。乳児研究の成果に照らせば、想定以上に優れた感覚・知覚（外受容）機能に対して、自身では直接的な外界変化が殆どできない運動（外作用）機能という機能間ギャップを、姿勢-情動機能が埋め、乳児を社会的・言語的存在として発達させる扉を開いたと考えられる。

②自閉症児における発声模倣と自他認識 情動と表象・言語との発達連関は、自閉症スペクトラムの3歳児 T 児にも観察された。自閉症のエコリアは、精神病理学的には言語の障がいとして位置づけられてきたが、実際には思考や行動を阻害する陰性の現象（「聴覚的反響」）と、言語や自他関係認識の発達に寄与する陽性の現象（「発声模倣」）がある。特別支援学校幼稚部にて T 児の発声模倣が観察されるようになる過程と、保育及び実験場面での変化を関連づけて報告する（詳細は、川田,2014 予定*）。

*川田学（2014 予定）乳児期における自己発達の原基的機制（仮）. ナカニシヤ出版。

③生活の中の体験と表現 発達心理学で「言語発達」というとき、そこから漏れていると思われるのが「表現」ではないだろうか。実験室を出て、保育のフィールドに行けば、乳幼児の言語とは、語彙や語連鎖よりも表現の問題である。子どもが何かを経験し、意味づけて体験化し、やがて何らかのメディアで表現される。言語はその中心的かつ伝達性の高いメディアであり（造形や描画は言語よりも伝達の抽象度が高い）、それは一般的な意味での言語発達よりも、「言語化」の局面を問うことである。

「自閉症スペクトラム児の情動と言語発達：共同注意の障害と発達的变化を中心として」

狗巻修司（佐賀大学大学院教育学研究科）

自閉症スペクトラム障害（以下、自閉症）の核となる障害は社会性の障害であり、とりわけ対人的相互交渉での行動に他の障害児にはみられない特徴や発達プロセスを示すことが明らかにされている。対人的相互交渉における質的な異常は発達早期から認められ、このことがのちに顕在化するさまざまな障害と関連する可能性を多くの研究が示唆している（例えば、Chawarska, Macari, & Shic 2013）。対人的相互交渉のなかでも、自閉症児の言語発達に関しては自閉症研究の創始期から行われ、知的障害を伴う重度の自閉症児の言語産出の検討から、いわゆる知創始期的発達に遅れがなく言語産出のある高機能の自閉症児の語用論的側面に関する検討にいたるまで多くの研究が行われている。その結果から自閉症にはかなり広範囲にわたる言語発達の質的な異常がみられることが明らかにされてきた（Wetherby, Watt, Morgan, & Shumway 2007）。

同時に、対人的相互交渉の質的な異常は、非言語的コミュニケーションでも認められる。本シンポジウムのテーマである情動の側面についても、発達の諸側面を統制した他の障害児に比べ、ポジティブな情動表出が少なく、仮にポジティブな情動表出がみられてもそれが他者に向けられたものでないことや、他者の示す表情からその情動を理解・推測できないことなどがこれまでの研究を通じて自閉症児の特徴として明らかにされてきた（Brunckner, & Yoder, 2007; Ryan & Charragain, 2010; Vernon, Koegel, Dauterman, & Stolen, 2012 など）。

現在までのところ、自閉症児にみられる言語発達と情動表出のそれぞれが発達的にどのように関連するのかについての検討は十分でない。しかしながら、この2つのスキルの関連についての検討する重要性は、自閉症児を対象とした共同注意スキルに関する研究結果から示唆されるだろう。共同注意スキルと言語獲得との関係は、定型発達児だけでなく自閉症児にも認められる（Maljaars, Nones, Scholte, van Breckeleer-Onnes, 2012; Siller, & Sigman, 2002）。また、共同注意の成立頻度だけでなく、共同注意が成立した場面での情動表出の量と質ともに自閉症児と他の障害児とで異なることも明らかにされている（Kasari, Sigman, Mundy, & Yirmiya, 1990; Park, Yelland, Taffe, & Gray, 2012）。本シンポジウムにおいての報告では、共同注意スキルに焦点を当て、その障害と発達的变化に関する先行研究と報告者自身の観察データから、自閉症児の情動と言語発達との関連について論じてみたい。